様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０１３９

研究課題名（和文）世紀転換期アメリカの病と癒しの研究

研究課題名（英文）Illness and Healing at the Turn of the 20th Century America

研究代表者
中川　千帆（Nakagawa, Chiho）

奈良女子大学・研究院人文科学系・准教授

研究者番号：７０４５２０２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀転換期のアメリカでは、科学の発展とともに心霊主義が流行し、宗教・医療においては女性の存在感が増した。本研究では、時代を反映したO.W. Holmes, William Dean Howells, Hamlin Garland, Edith Wharton等の作家が描いた医療と心霊主義にまつわる作品のなかに、女性の身体と精神がどのように描かれているのかを分析している。当時の流行となった病neurastheniaは、作品中において言葉にできない不安や問題を示す手段として描かれていく。女性の精神性を重視した風潮が、実はどのように女性の身体性の強調に寄与していったかを炙り出した。

研究成果の概要（英文）：This study explores the discourse in 19th and early 20th American fiction concerning the female body, in particular, how women’s health and illness are addressed. The novels of the writers I discuss--Oliver Wendell Holmes, Wiiliam Dean Howells, Hamlin Garland, Edith Wharton, and others--reflect a wide range of 'turn of the century' views related to medicine: the etiology of physical and psychological diseases, spiritualism, materialism, New Thought cults, the role of doctors, and the newly establish profession of nursing. One of my interests is "neurasthenia," which was considered at the time to have been born out of rapid industrialization and urbanization, yet the study reveals that the novels represent the condition as arising out of unarticulated anxieties and complaints that resist uniform interpretations. My research argues that the women’s spirituality, which offered women wider social access, leads them—paradoxically—to be defined physically and materially.

研究分野：英米文学

キーワード：病　医療　宗教　心霊主義　ジェンダー　New Thought　Neurasthenia

１．研究開始当初の背景

歴史研究者たちは、心霊主義の流行とアメリカの女性参政権運動の中に強いつながりを浮き彫りにしてきた。同時に 19 世紀のキリスト教宗派の中には、女性をリーダーとするものが生まれている。つまり、宗教的・霊的側面において、女性の特性を認めることによって女性の社会進出と権力拡大が可能となったのである。

近年、19 世紀後半の心霊主義の流行を取り上げた研究は、歴史研究という枠内に収まらず、パフォーマンス研究や写真等のさまざまな視点からも興味が高まっている。だが、その研究の中心はイギリスのものであったり、アメリカのものも今までのものと同様に霊媒に焦点を置くものであったりして、アメリカにおける心霊主義の流行を New Thought Movement や mind cure cults と結びつけて研究する動きは（New Thought を論じる宗教研究者を除いては）見られなかった。このように心霊主義における女性の台頭とその他の文化的・社会的現象との関わりを詳細に論じたものは、まだ数少ない。そこでこれらの現象と、文学研究でたびたび注目されてきた病、特に女性の病の問題を包括的な視点から考える必要があるのではないかと考え始めた。文学作品をそれらの点に留意して論じることにより、新しい視点が提供できるのではないかと考えたのである。このような点から、文学研究者として、アメリカの心霊主義や医学の流れと関連づけて、当時の小説を分析することにより、20 世紀転換期の女性の身体と病の表象を考察したいと考えた。

２．研究の目的

本研究は、20 世紀へとの転換期にアメリカにおいて、特に心霊主義の流行に焦点を置きながら、連動する医学と宗教の流れを理解し、女性の身体と心理がどのように理解されていたかを当時の文学小説の中に探るものである。女性たちの病と癒しへの関わりの中で、どのような変化が見られたのか、またはどのように近代的な女性理解の土台が作られたかをフィクションのみでなく、宗教や医学に関わる知識を探ることによって、理解していくことを目的とする。

この当時の精神的病については、ジェンダー的側面からヒステリーに注目した研究が充実している。精神医学が発達する前のアメリカ社会において、女性の病が精神的に、または身体的にどのように理解されたかを探るため、本研究では William James が “Americanitis”と名づけた neurasthenia（神経衰弱）に注目した。同時に、女性と医療の関わりに変化が見られる時代であることから、専門教育を受けた看護師や女性医師の登場が、女性の病の理解とどのように関わっているかをも探りたいと考えた。

３．研究の方法

研究の方法は、19 世紀後半に流行した心霊主義、医学、宗教に関わる歴史的視点からの研究書と、当時書かれた書物を調べることによって、女性の身体と精神に関わる概念を抽出し、その知識に基づいて、当時書かれたフィクションを分析していくという方法をとった。そのため、ジェンダー研究の視点から書かれた文学研究や歴史研究以外にも、心霊主義に関する歴史研究、医療史、宗教史等の知識を深めることが研究の前段階の準備として必要となった。

研究の対象とする小説については、当初の予定では、女性の作家によるものに焦点を絞る予定であった。だが、リサーチを進めるうち、心霊主義に触れた作品を書いた作家が主に男性のリアリスト作家たちであったということから、予定になかった男性作家たちや作品を取り上げることになった。多くが現在ではほとんど読まれることのない作品であり、先行研究も少なかったため、歴史的文脈を理解することに務めながらも、新しい意味づけをすることに努力した。一方、すでに十分な研究の蓄積がある作品に対しては、先行研究を参考にしつつも、あくまでも女性の精神・身体と病に注目することで、新しい視点と解釈を打ち出すことを目指した。

４．研究成果

下に記載する研究成果は、研究を行った順番ではなく、時代順に並べることにより、より時代の流れに沿うようにしている。

(1)①「Oliver Wendell Holmes の “medicated novels”における女性の病と道徳」

現在では法律家 Oliver Wendell Holmes, Jr. の父としてのみ思い出されることの多い Holmes は医師であり、エッセイで知られる作家であるが、彼が心理的病の原因と治療の可能性を小説の中で探った作品を取り上げ、その中に見られる女性の身体と心の概念を分析したものである。父親が牧師であったこともあり、Holmes の作品には人間の心を扱う領域が宗教なのか、医学なのかという議論を見ることができる。19 世紀前半以降カルヴァン派の教えに対し反発が出る中、Holmes は牧師の権威的な立場に代わる者として医師を想定し、病人に同情的でありながらも、科学的な立場を取ることを推奨していることがわかる。

この研究において焦点を当てたのは女性の病と道徳という点であることから、Holmes の小説 3 作中、病人が女性である最初の 2 作、*Elsie Venner* と *The Guardian Angel* を扱っている。この 2 作品に両方において治療の可能性は探られているが、「道徳的な歪みを生じさせる」正体の明らかでない病が取り上げられており、それはヒステリーと診断されることはないものの、似たものとして描写されている。前者のケースでは、Holmes は治療が不可能であるとして、医学の限界を認める一方、

後者においては医学的・教育的立場から道徳的指導者が病を克服するよう導くことができるとしている。だが、何より興味深いのは、宗教と医学の権威論争の一つの結論として、Holmes の代弁者を務めるキャラクターが「道徳」の領域において個人の責任を認めることができない病がありうる、と当時の医学的理論に言及しながら主張していることである。Holmes が提唱した新世界における新しい知的貴族階級 Brahmins についての章から始まる *Elsie Venner* では、ニューイングランドにおいて道徳的な歪みを生まれ持つ主人公が、それを矯正することができないまま成長することが、Brahmin の論自体に大きな問題を突きつけるものとなっている。その解決法として、Holmes は民間伝承の悪や他人種・他文化からの影響をほのめかして、それらを排除するという方法をとっている。一方、この個人の責任を問うことができない道徳的な病が、女性の性と身体を原因とするという理論へと移行していることは、女性の性と身体そのものが罪深いものであるという従来からの宗教的女性観とさほど違わないものであり、新しい語彙と理論によって、女性の身体と精神が語られるようになったことを見ることができる。

(2)心霊主義と女性の精神と身体

①「William Dean Howells の心霊主義小説にみる女性のセクシュアリティ」

リアリストとして認識されている Howells は、現象そのものではなく、社会的流行として、心霊主義に興味を持ったようであるが、Howells の現在ではほとんど読まれることのない *The Undiscovered Country* は、心霊主義の流行の中で霊世界との交流を求め続ける科学者の失敗を描く作品である。興味深いのは Howells が興味を示していたシェーカー教のコミュニティを登場させていることである。現在ではほぼ消滅した宗派の特徴は、禁欲主義を貫き、共同生活を送るというものである。19 世紀初頭には多くの改宗者を得ていたシェーカー教も、Howells の時代にはすでに縮小の一途を辿っていた。だが、自ら共同体を訪れ、訪問記を発表していた Howells は、産業化が進む社会から離れた牧歌的な共同体への憧れに似た感情を抱いていた。心霊主義とのつながりからシェーカー教を登場させている本作品ではあるが、霊媒となる科学者の娘に注目することにより、本研究ではシェーカー教が心霊主義と共通する女性のセクシュアリティの新しいあり方を提示するものとして論じた。

本研究において明らかになったのは、心霊主義の流行における、女性たちの身体性・セクシュアリティの持つ意味である。霊的な鋭敏さを持つということで多くの女性が霊媒となったが、それは逆に女性の身体性が強調される結果となった。この描かれ方は、Henry James の *The Bostonians* に登場する霊媒とも共通する。霊媒たちの身体は、容器として利用され、そして交霊術の実践のなかで触ることができる肉体として舞台の中心に据えられる。父親の科学的追究のために霊媒となって交霊会に参加する娘は、その精神性ではなく身体性を父親に利用され、参加者たちには美しい身体の例として観察される陳列物となるのである。Howells の作品では、その身体性が父親との近親相姦の危険をはらむ問題として描かれる。心霊主義の可能性を追い求めて父親が行き着くシェーカー教の共同体は、娘の身体性からの逃亡を可能にする場所となる。最終的には娘は、身体性と精神性のバランスを取り戻す結末となり、Howells が禁欲主義を肯定しきれなかったことをうかがわせる。Howells の作品は、霊・精神性の重視がセクシュアリティからの解放と抑圧、双方へと結びついたことを示している。

②「Hamlin Garland の心霊主義小説における女性の身体とテクノロジー」

Garland は中西部を舞台とした地方主義作家として現在では認識されているが、アメリカの心霊協会の創立時からのメンバーであり、アメリカにおいて数少ない、心霊主義に対する継続的な興味を持ち続けた作家でもある。本研究では、Garland の心霊主義を扱った小説 2 作を中心に、その他 2 作の心霊主義の経験をつづったノンフィクションをも取り上げ、Garland の心霊現象に対する考えの全体像を探った上で、Garland の作品を分析した。

Garland のフィクション、ノンフィクション作品中に特徴的な表現は、霊媒が果たす役割—死者の声を伝えること—を電話に喩えていることである。心霊主義において死者からのメッセージが電報に喩えられることは、先行研究においても指摘されていることであり、当時の最先端のテクノロジーと新しく科学的な語彙で説明されようとしていた心霊主義が、共通点を持つのは自然な流れである。だが、大多数が女性であった霊媒がテクノロジーと同化させられることは、女性の身体が道具として認識され、個の意識をほぼ持たないものとして見られていたことをも示唆する。Garland の作品中では、この霊媒の身体が機械と化するとともに、父親と娘、母親と息子の物語として展開していく。フェミニズム的な視点からは霊媒となることが女性に自分の声を持つことを可能にしたという評価を下されてきたが、Garland の作品中では霊媒である女性は家父長制において父の声を伝える道具と化していく。フロイト的な家族物語として描かれる霊媒の物語は、最終的には「あるべき」成長過程をなぞり、父親の影響下から脱して、新しい家長を得て新しい家庭を始める結果となる。Garland の２作品では、女性の霊媒たちはともに家父長を失った家庭の中に存在するにも関わらず、家父長制的社会・文明を持続させるものとして

の道具として機能する。本研究においては、Garland の心霊主義小説が、霊媒となることによって不在の家父長の声を再生する機械となる女性たちを描いていると結論づけた。

③「オムニバス小説 *The Whole Family* における女性の居場所と霊媒」

1907-09 年に発表された 12 人の作家によるオムニバス小説 *The Whole Family* は、20 代の娘が結婚する過程を描く「健康な家族の物語」という予定から逸脱していく中で、どのような結末を与えるかに関して作家同士の議論が見られる小説である。一家の 20 代の娘とともに、物語の中心に躍り出たのは 30 代の独身の叔母であり、中年独身女性“old maid”にどのような居場所を与えるべきか、が様々なキャラクターによって議論され、検討される。このオムニバス小説は、崩壊しつつある家庭の癒しの可能性を探っているといえるが、それらが 20 世紀初頭に流行した医療のバリエーションとして提示されていることを指摘した。

複数の作家たちが、2 人の独身女性とホメオパシーの医師とのカップリングを示唆するのは、「結婚」が女性たちの病気を治すものだとして考えられていたこととともに、彼女たちが役割を持たない女性として neurasthenia のハイリスクグループであり、根本的には心理療法といえるホメオパシーによって治癒されうることを示している。最終的に 20 代の娘が心理学者と結婚することは、彼女の病が新しい学問によって理解されうるという結論を示唆している。また、old maid は、家族を離れた場所に、心霊主義のヒーラーとなることによって自己の居場所を見つける結果となる。それは心霊主義が従来の家庭という形からの逃避を可能にした、新しいセクシュアリティの形として認識されていたと同時に、old maid は永遠に健康な家庭の物語から排除されたことも意味している。

(3) ①「New Thought Movement と女性の役割——看護と病人」

本研究においては Edith Wharton の作品を中心に取り上げつつ、クリスチャン・サイエンスの創設者 Mary Baker Eddy を巡る言説を検証し、女性と医学との関わりを分析した。Mary Baker Eddy は 19 世紀後半、物質・身体は誤りであり、魂のみが存在するとした物質否定論に基づき、祈りによって病を治す新興宗教を始めた。New Thought Movement においてもっとも大きな成功を収めた Eddy は、Mark Twain からの批判を始め、生前にも世間から厳しい視線を向け続けられた。その一つのポイントとして、彼女が病弱な人間であったことが挙げられる。病人からヒーラーとなった彼女に対する世間の見方、そして彼女自身が書いたクリスチャン・サイエンスの教義や回顧録等を分析することにより、Edith Wharton の中篇である *Ethan Frome* に新しい視点からの分析を行った。

Edith Wharton の *Ethan Frome* は、荒廃するニューイングランドの生活が描かれた地方主義作品として見られることが多い。Ethan を苦しめる悪漢として理解されている Zeena Frome は、冷酷で悪意に満ちたキャラクターとして解釈されるのが通常である。この Zeena を実在の歴史的人物 Eddy と並べて見ることにより、病人とヒーラーの立場を行き来する人物として、女性の病と女性のヒーラー・看護人としての見解を分析している。Wharton は *Ethan Frome* の前に *The Fruit of the Tree* という上流社会出身の看護師を主人公とする小説も書いており、彼女が 19 世紀半ば以降、女性が職業的看護師として社会的に認識された職に就くようになったことに興味を示していたことがわかる。女性に向いた職業として看護や医療が認識されている一方、女性が病に苛まれがちであるという 19 世紀の認識は、病人であることと病人を世話すること、双方を女性らしさの特徴として見ていたことを意味する。

しかし、Zeena Frome と Eddy は、女性らしさの領域から逸脱することがないにも関わらず、男性を脅かす恐ろしい女性として描かれる。それは、女性らしさの領域から逸脱することがなくても、彼女たちの病と医療への関わりが女性の領域を逸脱するものとして解釈されていくからである。「同情」という概念が Wharton の作品には重要な感情として描かれていくが、女性的な感情としてではなく、女性的に「衝動的」な感情として理解されている。19 世紀後半からの女性と医療との関わりは複雑さを増しており、女性らしさという概念は単純には規定することは難しいが、特に経済活動や物質主義的との関わりにおいて、女性の病と医療は再解釈されていくことが Zeena と Eddy の例には読み取れる。女性の身体と精神は、医療や宗教と関わることによってさまざまなイデオロギー的側面からの解釈が行われるが、もっとも大きな要素として経済活動との関わりが見られることを明らかにした。

(4) ①「現在の想像力に見られる女性の身体と精神」

本研究に派生するものとして、現代アメリカテレビシリーズ *Dollhouse*（2009－2010）に見られる女性の身体と精神の関わりについて考察した。この研究をこの課題の一部として考えるのは、心霊主義において魂を霊媒の身体に「出し入れ」したように、このＳＦドラマでは主に女性の「自己」をプログラムによって「出し入れ」することができるという設定になっており、女性の身体と精神を科学的・ＳＦ的語彙によって進化した形で表現していると論じたからである。19 世紀後半のＳＦ作品であり、また心霊主義小説であるヴィリエ・ド・リラダンの『未来のイヴ』との比較考察をしながら論じた本研究は、女性の身

体が現在に至るまで様々な哲学的・科学的・文化的概念の変化を反映しながらも、似たような理解に基づいて見られていることを指摘している。身体性は女性の抗うことのできない特徴として、現代にも描かれ続けているのである。

ヴィリエの『未来のイヴ』は、実在の女性の魂を持たないアンドロイドを作る物語である。実在の女性の身体に恋焦がれながらも、彼女の魂には我慢ならないとする貴族のためにアンドロイドを作るフィクションのエジソンは、アンドロイドを動かす魂として、病のために身体を棄てなくてはならない助成を利用する。Joss Whedon 製作による *Dollhouse* においては、「魂」を抜かれた人間たち（dolls）が主に男性の顧客のファンタジーに応えるためにオーダーメイドの「魂」・「自己」を入れられる。どちらにおいても、女性の身体性のみが求められ、女性の「個」「自己」は男性の欲望の前に棄てられる。だが、「自己」が幻想とされる現代において、*Dollhouse* の設定は身体性のみを要求される人間たちに対する暴力を批判するものとはなっていない。Whedon のＴＶシリーズでは、主人公が多くの自己・魂を自在に操る存在となることにより、女性の身体性を超えた自己を確立することになる。現代のＴＶドラマにも、継続する女性の身体性の問題が浮かび上がってくることを指摘しつつ、新しい自己の可能性が描かれていることを分析した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①Chiho Nakagawa. “Amoral Girl and New England Brahmins: O.W. Holmes’s *Elsie Venner*.” 欧米言語文化研究 (査読無)第 2 号(2014)：19-41.
http://hdl.handle.net/10935/3924

②中川千帆. 「未来のエコー：『ドールハウス』に読むファンタジーの自己」 れにくさ (査読無) 第 5-1 号 (2014)：271-291.

③Chiho Nakagawa. “Spiritual Bodies and Physical Spirits in *The Undiscovered Country*.” *The Journal of American and Canadian Studies* (査読有) 31 (2013): 79-95.
http://dept.sophia.ac.jp/is/amecana/J2/PDF/31-04_Spiritual_Bodies_and_Physical_Spirits_in_The_Undiscovered_Country.pdf

④Chiho Nakagawa. “Spiritual Telephone: Hamlin Garland’s Spiritualism Novels.” 欧米言語文化研究 (査読無) 第 1 号（2013）：23-40.
http://hdl.handle.net/10935/3698

⑤中川千帆. 「Old-maid Aunt の運命：*The Whole Family* における病と癒し」 外国文学研究 (査読無) 第 31 号(2012)：1-26.
http://hdl.handle.net/10935/3411

〔学会発表〕（計 5 件）

①Chiho Nakagawa. “A Neurasthenic Healer in *Ethan Frome*.” Anxious Forms 2014. University of Glasgow, Scotland, UK. 8/22/2014.

②Chiho Nakagawa. “The Future Echo: A Self Fantasy in *Dollhouse*.” The Whedon Studies Association. State University of California, Sacramento. USA. 6/21/2014.

③ Chiho Nakagawa. “Spiritual Telephone: Hamlin Garland’s Spiritualism Novels.” International Gothic Association. University of Surrey, Guildford, Surrey. UK. 8/7/2013.

④Chiho Nakagawa. Spiritual Bodies and Physical Spirits in *The Undiscovered Country* and *The Bostonians*.” Nineteenth Century Studies Association. Ashville, North Carolina, USA. 3/22/2012.

⑤中川千帆. 「Old-maid Aunt の運命—*The Whole Family* における病と癒し」 日本アメリカ文学会関西支部 11/5/2011.

６．研究組織

(1)研究代表者

中川　千帆（NAKAGAWA, Chiho）
奈良女子大学・人文科学系・准教授
研究者番号：70452026